

# 性の多様性に覚悟をもって 向き合うために

田中 かず子

ジェンダー概念を採用することにより強固な生物学的還元論を乗り越えて、ジェンダー研究は今では一つの学問分野として認められるようになりました。しかし、これまでジェンダーとしてとらえられてきたのは、異性愛を当然とする「ヘテロジェンダー」であり、性別違和を感じる人たちは異常として排除する「シスジェンダー」でした。いまだに「人」とはヘテロシスジェンダーの成人男性のことであり、女性に対するミソジニー（女性嫌悪）、そして非異性愛やトランスジェンダーの人たちに対するホモフォビア（同性愛嫌悪・恐怖症）という構造的暴力に抗<sup>あ</sup>っていくにも、ヘテロシスジェンダーの壁が大きく立ちはだかっています。昨今、性の多様性を認めようという運動が力を得てきていますが、これまで排除されてきた性的マイノリティを包摂することにとどまるのであれば、既存の社会構造は維持・強化されるだけです。

性の多様性に覚悟をもって向き合うためには、その人の性的指向、性自認、また性的嗜好がいかなるものであろうとも、尊厳をもって生きていくことができる社会とはどのようなものなのか、想像力をフルに働かせて考えていく姿勢が求められます。性的特権を享受しているはずのマジョリティであっても、異性愛規範の下、自らの欲望を「正しいセクシュアリティ」にのっとりよう抑制しているはずです。そして、特定の人を“正しくない異常な人”として抑圧し排除する構造的問題と個人の欲望は、わけて考える必要があります。異性愛規範に抵抗するからといって、異性への性的欲望を貶<sup>おとし</sup>めはしません。「女らしくあるべし」という規範による構造的抑圧に抗<sup>あ</sup>っても、受動的なエロスへの快感やひらひらレースのついたピンクの洋服が好きという自分の好みは肯定されるべきです。

今こそ、性やセクシュアリティ、欲望について自由に語らうことができるための言葉と安心安全な「場」の確保が必要なのではないでしょうか。



## PROFILE

たなかかずこ：お茶の水女子大学を卒業後、アイオワ大学大学院に進学。1987年ジェンダー階層論で社会学博士号を取得し、1989年国際基督教大学（ICU）専任教員となる。2004年からICUジェンダー研究センターセンター長、2005年からジェンダー・セクシュアリティ研究プログラムのコーディネーターを務める。2014年国際基督教大学を退職し、ジェンダー・セクシュアリティ研究理論を参加型学習につなぐ個人事業「ファームメント」設立。